

1-2. 社会財として

伊勢湾と私たちの心象について考えてみましょう。

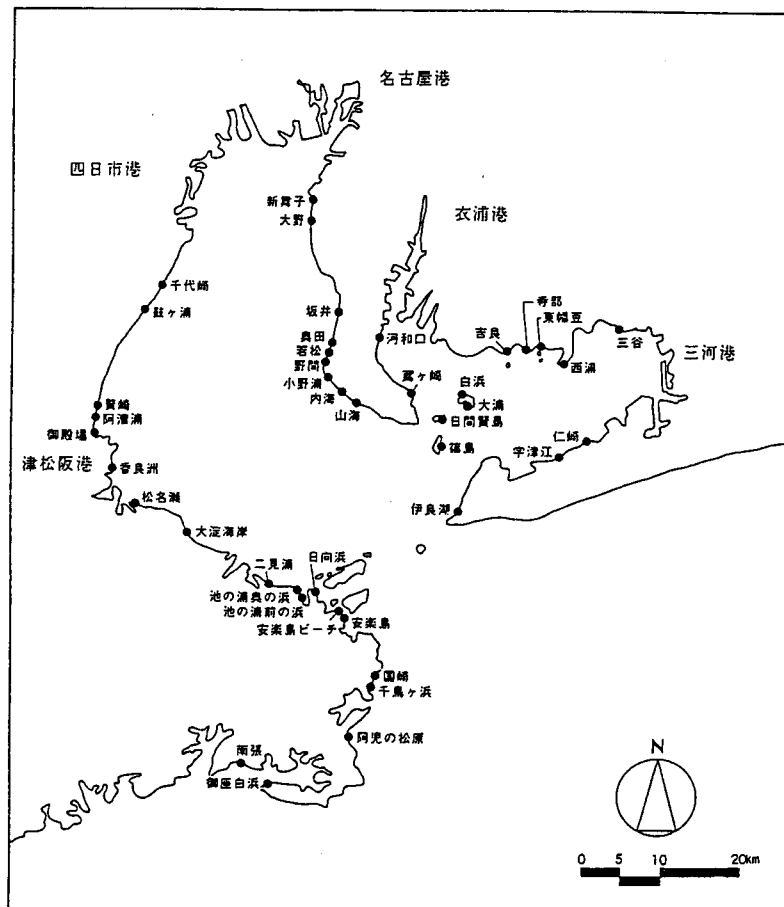
1-2-1. 癒しの伊勢湾

海辺にたたずみ、広い海、青い空、砂浜に遊ぶカニ、さざなみの音、松林にそよぐ風に接し、波間に身を委ね、砂と戯れ、貝を漁り、はるかに伊勢の山並みを望むと、それだけで私たちの心が何となく癒されるような感じがします。

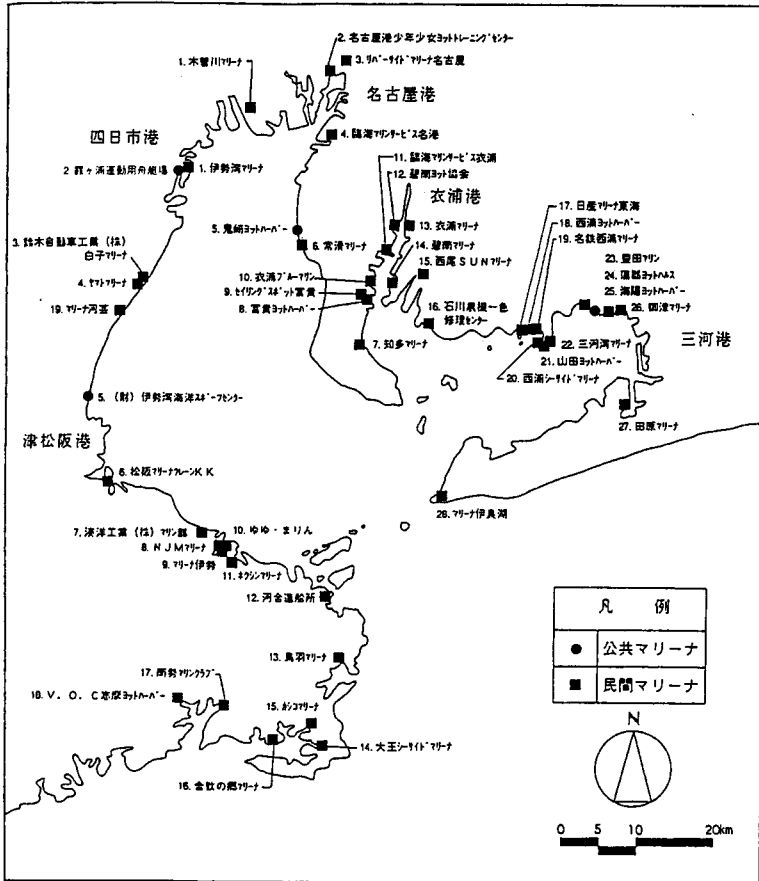
伊勢湾は、無味乾燥の雑踏のなかで忙しく日々を暮らす私たち人間も「自然に活かされている存在」であることを改めて思い起こさせてくれます。

この自然回帰の時を求めて、現在では、海水浴、潮干狩り、釣りのほかに、ヨット、モーターボート、ウィンドサーフィンなど様々な海洋性レクリエーションの場として、多くの人が伊勢湾との関わりを求めています。

しかし、一部の心無い人たちによるゴミ投棄、砂浜への車両乗入れ、放置船などが問題となっており、私たちのマナーが問われています。



資料：愛知県、三重県市販地図を参考に作成
図. 海水浴場の分布



資料：運輸省第五港湾建設局調べ
図. マリーナの分布

マリーナ施設の整備は逐次進められつつあるが、伊勢湾ではプレジャーボートの約6割が放置艇であり(平成9年)、これらプレジャーボートの不法保留や廃船投棄などの新たな問題も生じている。

表. プレジャーボートの保留・保管状況(平成9年)

		マリーナ等	マリーナ等以外	放置艇	合計
東京湾	実数	7,600	1,168	7,896	16,664
	構成比	45.6%	7.0%	47.4%	100.0%
伊勢湾	実数	3,145	1,505	7,970	12,620
	構成比	24.9%	11.9%	63.2%	100.0%
大阪湾	実数	5,332	695	8,140	14,167
	構成比	37.6%	4.9%	57.5%	100.0%
全国	実数	47,102	22,306	138,194	207,602
	構成比	22.7%	10.7%	66.6%	100.0%

資料：運輸省港湾局、水産庁、建設省河川局
「プレジャーボート全国実態調査結果」(平成9年)

砂浜への車両乗入れ、レクリエーションの際のゴミ投棄が生物の生息環境を悪化させている。



写真. ゴミ投棄抑制の看板(明和町)



写真. 砂浜への車両乗入れ(鈴鹿市東磯山地区)

ステップアップコーナー

小型船舶免許

船舶免許は、操縦する船舶の大きさと航行できる区域に応じて次のような種類に分かれており、それぞれの資格は、それより下級の資格をカバーしている。免許の種類としては、①一級小型船舶操縦士(ボート免許のトップクラス)、②二級小型船舶操縦士(トローリングを楽しめる)、③三級小型船舶操縦士(大きなボートに乗れるが、遠くには行けない)、④四級小型船舶操縦士(最もポピュラーな免許、5トン未満の船舶)、⑤五級小型船舶操縦士(水上オートバイやパスポートに)、⑥湖川小馬力五級小型船舶操縦士(バスフィッシング程度ならOK)の6種類がある。

特に、水上オートバイから全長8～9m程度のモータークルーザーやフィッシングボートまで操縦することができる四級小型船舶操縦士免許の取得者が多く、走航できるエリアは、川や湖、湾の平水区域と海岸から5海里(約9キロメートル)の水域と伊勢湾の沿岸海域がその許可水域であることから、近年、多数のプレジャーボートの輻湊によるトラブルが発生している。(参考：(財)日本海洋レジャー安全・振興協会資料)

優良マリーナ認定制度

この認定制度は、マリーナの安全性と利便性の高い施設の普及を図るため、適切な規模・構造等を有すること、プレジャーボートの運航の安全性が確保されていること、ビジター艇(保管艇以外の入港船舶)の受入が行われていること等の要件を満たしたマリーナを、優良マリーナとして認定する制度であり、1990年7月に運輸省告示により創設された。これにより、マリーナの安全性・利便性に関わる一定の水準を保つ優良マリーナの普及を促進し、利用者及び一般社会に広く周知を図るとともに、マリーナ事業の健全な発展と社会的地位の向上確立に寄与することが期待されている。

豆知識コーナー

湯川秀樹と伊勢湾

ノーベル賞の日本人最初の受賞者湯川秀樹博士の著わした『旅人』によると、博士が京都一中の時代、津市で同市発祥の泳法「観海流」の訓練に励んでいた様子が生き生きと描かれている一節があります。この合宿訓練では1年生で50町(5.5km)、2年生で3里(11.8km)、3年生で5里(19.6km)も泳ぐことが日課とされて、湯川博士は「助教」の免許を取得された。そう言えば、三重一中(現在の津高校)の校歌に「贅崎に来て沖を見る かの島山に泳ぎゆき 泳ぎ帰へせし人ありき 我等もかくは鍛えなん」とあるのも肯ける。

海水浴と伊勢湾

全国で最初に海水浴場が開設されたのが二見浦である。明治15年に内務省衛生局長の長興専齋が三重県下を巡視された際に、二見浦は海水浴場に極めて適切な地であると推奨されたことが発端となって、同年10月19日に盛大に海水浴開典が執り行われた。(参考：二見町史)

また、現在ではその面影を留めていないが、四日市市史によれば、大正9年に四日市市富田浜が海水浴場として賑わっていた資料が掲載されている。「北勢の納涼地として知られたる三重郡富田町富田浜は、逐年清遊客増加の趨勢にあり、即ち本年7月1日より4日迄の同町仮停車場の乗降客数を見るに、乗客は昨年2,629人なりしに本年は3,754人、……3割以上の増加を示し居るが、料理店に登りて遊興をなす者は昨年比し著しく減退を告げ、各店共失望の態なるが、それは経済異変動の結果と見るを得べく、それに反し俗に浜州と称する小飲食店はすこぶる好景気にて、売上げの如き昨年に比し約3割の増加なり」と(大阪朝日新聞)。不景気により財布の紐がきつくなるのは昔も今も同じようである。

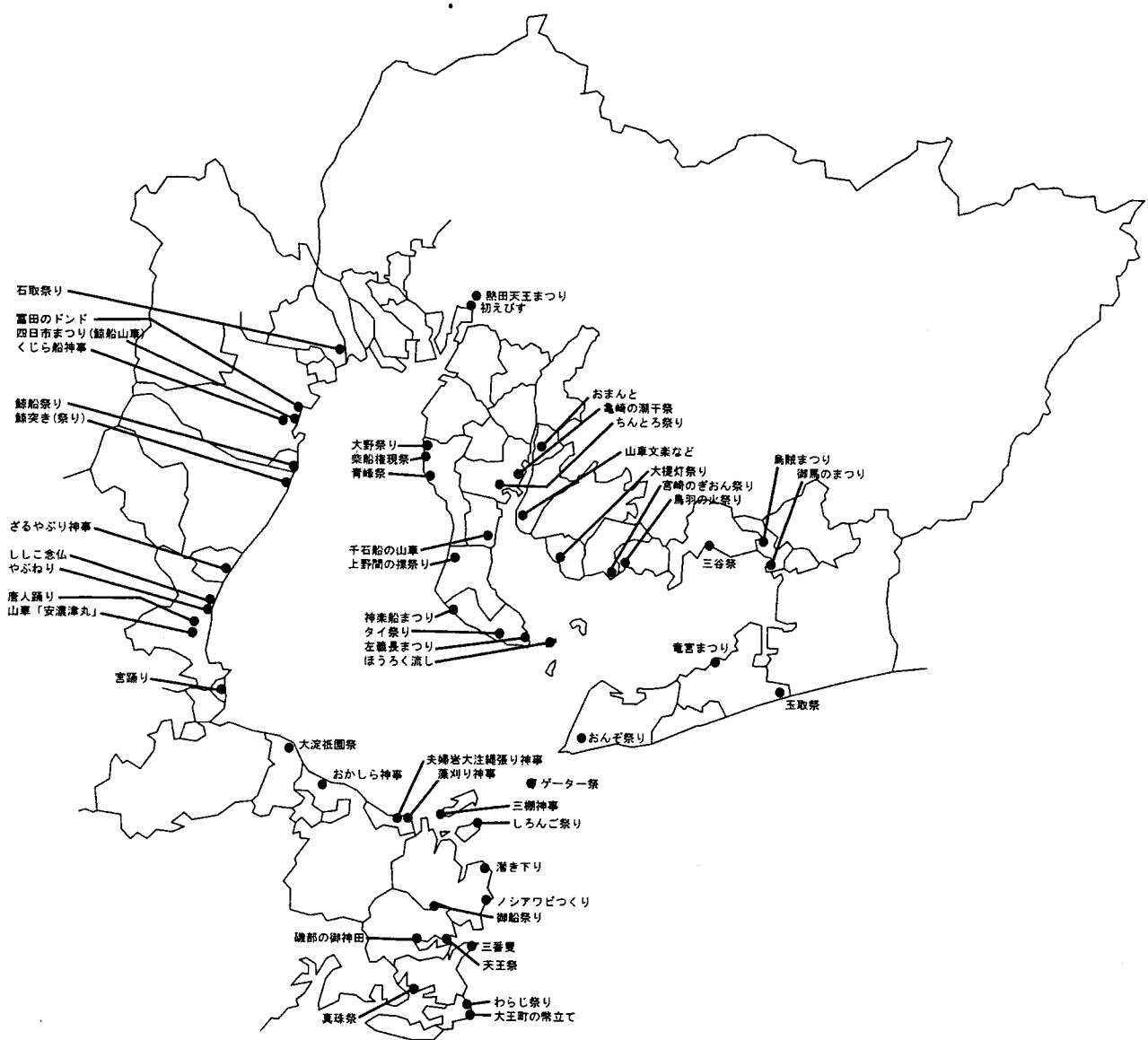
1-2-2. 畏敬の伊勢湾

伊勢湾は、このように私たちに豊かな恵みと癒しを与え、時に脅威を与えてきました。私たちの先人はこれを「自然の摂理」として受け入れ、伊勢湾を畏れ、敬ってきました。

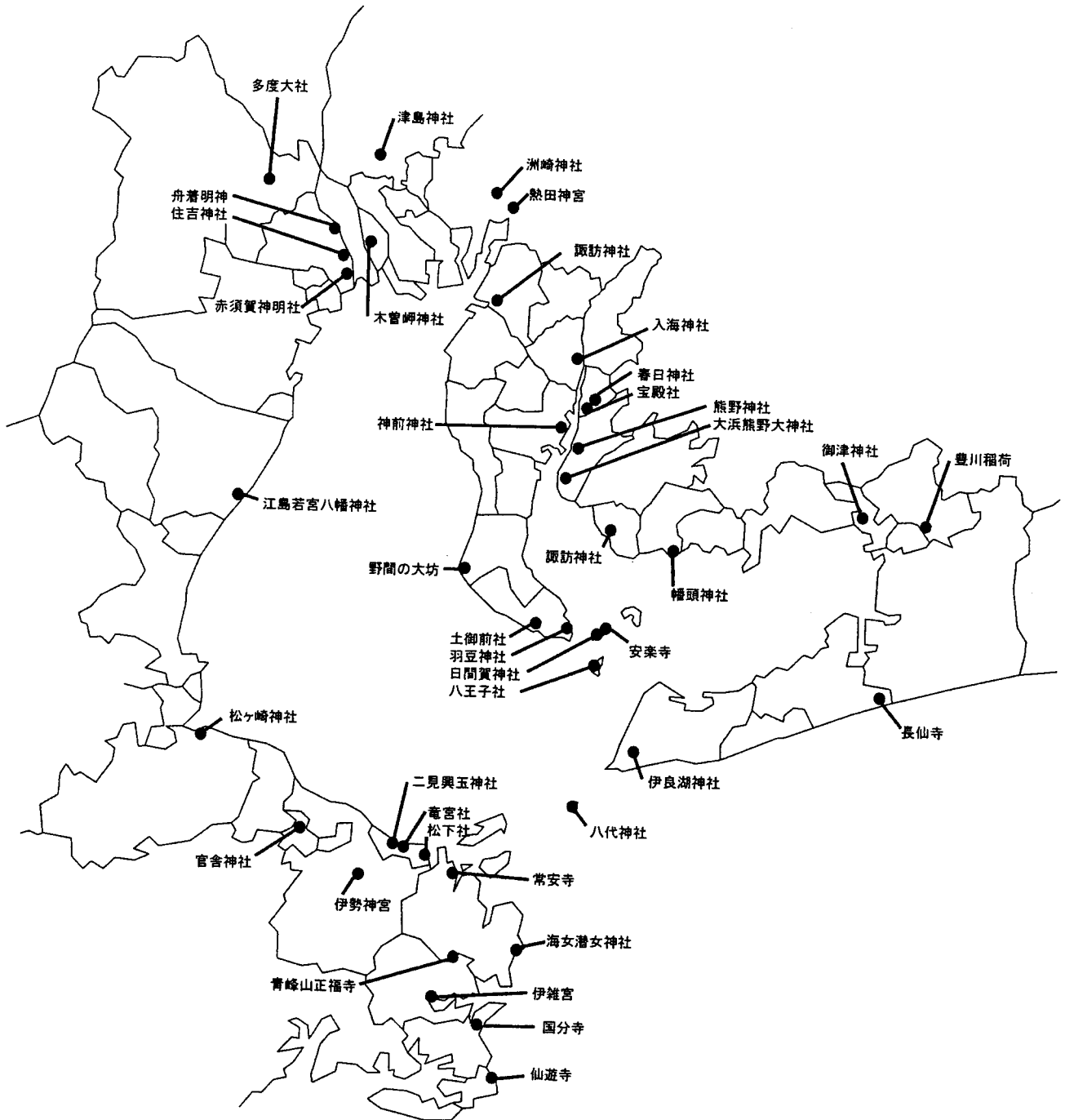
そうした思いが、多くの祭事、民話、伝承などとして今に伝えられ、また、歌、絵画、文学として表現されてきました。

しかし、伊勢湾との関わりが少なくなるにつれて、実感をもって伊勢湾への畏敬の念を私たちの次世代に伝えにくくなっています。

生活の場だけではなく、信仰の対象としても伊勢湾はとらえられ、海との関わりを示す祭り、神社、寺、山などが数多く残っている。



出典：第五港湾建設局他「港湾文化基礎調査報告 伊勢湾・三河湾沿岸部」1994.3
 図. 海の祭り(祭り・神事など)



出典：第五港湾建設局他『港湾文化基礎調査報告 伊勢湾・三河湾沿岸部』1994.3
 図. 海の祭り(祭りの対象の神社、寺、山など)

万葉集と伊勢湾

『万葉集』にも、伊勢湾やその周辺を取り上げたものが少なくない。

- 「伊勢の海の磯もとどろに寄せる浪恐ろしく人に恋ひわたるかも」(巻4)
- 「伊勢の海ゆ鳴き来る鶴の音どろも君しきこさば吾恋ひめやも」(巻11)
- 「伊勢の白水郎(あま)の朝な夕なに潜くとふ鮑(あわび)の貝の片思ひにして」(巻11)

このように、『万葉集』にみる「伊勢の海」は、湾内ばかりか志摩一帯を含んでいるが、なぜか恋の歌ばかりである。万葉の歌人たちにとって、伊勢の海とは、恋こがれる存在であったのだろう。(出典：伊勢湾研究会編『伊勢・三河湾再生のシナリオ ― 海と人間の共生を求めて ―』1995.6)

平家物語と伊勢湾

平家物語の中に(巻第一第二句「三台上祿」、平清盛が安濃津から船で熊野詣をする際に、船に鱸(スズキ)が飛び込んだことを瑞祥として喜んだという故事が載せられている。しかし、その後の平家一族は「おごれるものは久しからず」で壇の浦の合戦で滅亡することになる。因みに平清盛の法名は「浄海」。

徳川家康と伊勢湾

本能寺の変の際、堺にいた家康は伊賀を經由して白子(鈴鹿市)から船で三河にとって返したといわれている(この他に長太浦渡海説、四日市渡海説がある)。この時の白子の人の協力もあってか、元和5年(1619年)に徳川紀州藩に組み込まれ、寛永11年(1634年)には白子に約5万石を支配する郡奉行所(のち代官所)が設置されると、紀州藩国米の港として保護され、同じ紀州藩松阪の江戸店持伊勢商人の台頭とともに、白子積荷問屋、白子回船仲間が作られ、伊勢商人の指定積荷港として急速な発展を遂げることになる。(参考：鈴鹿市史)

海に関わる諺

『海(ウミ)の物(モノ)とも山(ヤマ)の物(モノ)ともつかない』

将来どのようなになるか、全く見当がつかないこと。

『井の中の蛙(カエル)大海を知らず』

井戸の中に住む蛙(カエル)は、その井戸のほかに大きい海があることを知らないでいる。自分の周りの、ごく限られた範囲のことしか考えない、見聞の狭いこと。世間知らず。

『河海(カハ)は細流(サイリュウ)を択(イ)ばず』

大人物になるには、度量広く、どんな種類の人でもえり好みをしないで、自分の仲間に入れなければならない、という意。川や海はどんな小さい流れもいとわずに包容するから、大きな川や海となることができるのである。